

奈良・和歌山・三重・大阪・京都の茶粥習俗と分布

○前田昭子¹ 南幸² 川井考子³ 藤沢祥子³ 早川史子⁴(親愛女短大¹、桜井女短大²、和歌山信愛女短大³、滋賀県大⁴)

目的 江戸、大正、昭和のはじめから現在に至るまで、近畿地方を中心に茶粥が主食として食されている地域があることの報告はあるものの体系的なものではない。近畿の茶粥習俗の実態を明らかにし、体系化するため、茶粥に関する調査を行った。

方法 調査対象は大阪および京都府、三重、和歌山、奈良県在住の栄養士全員。

結果 茶粥はどの地域も主食として、特に朝食での頻度が高い。三重県、京都府、大阪府では茶粥を食べる地域は山間部、海岸地域などに限られているものの日常的に盛んに食べられていた。これらの地域での茶粥の呼称はチャガユが一般的である。一方、和歌山県や奈良県では全県で盛んに食べられており、チャガユと同じ程度にオカイサンとも呼ばれ、カユすなわちチャガユと認識されるほど一般的であり、サツマイモ、モチ、カキモチなどを加えた茶粥がより多く食されており、茶粥を食べる主たる理由は節米が目的であったことが推論できる。節米の目的であった茶粥習俗が、米が豊富な現在でも根強く残っているのは美味しい、好きなどの理由からである。何故近畿地方全域に茶粥習俗の分布がみられたのか、またなぜ今でも茶粥習俗が残存しているのか、食文化を考える上で興味深い。